

国際教育研究所  
**NewsLetter**

2017年10月10日 第74号  
国際教育研究所事務局  
〒162-8055 東京都新宿区横寺町5-5  
公益財団法人 日本英語検定協会内

[http://www.geocities.jp/international\\_educational\\_inst/](http://www.geocities.jp/international_educational_inst/)

巻頭言

会員は自分に有益なキャリア・アップ活動に挑戦しよう

勝又美智雄  
国際教育研究所副理事長・副所長  
国際教養大学名誉教授

今春、国際教育研究所が新しい組織体制で経営の刷新を図ることになった。1991年の発足以来、研究所所長として組織を牽引してきた羽鳥博愛・東京学芸大名誉教授が90歳を超える高齢を理由に引退し、長く運営委員長として研究所の企画と組織運営を担当してきた山岸信義氏が所長に就任した。同時に羽鳥氏とともに研究所を支えてきた中核メンバーの多くがやはり高齢化で現場から離れ、この2、3年、月例会で報告した若い教員、研究者たちが新たな会員、理事となって、会員の世代交代が一気に進んできた。

かく言う私も昨年、グローバル人材育成教育学会の副会長（現在は理事）として同学会の大会で活動していた折に、山岸さんから「紀要に何か書いてほしい」と頼まれたのがきっかけだった。研究所の活動内容も十分に理解しないまま、会員のほとんどが英語教師であると聞いて、とりあえず紀要に「グローバル人材教育に必要な教師の役割とは何か」と題する文章を指定の10ページ分寄稿した。さらに今年5月の月例会では、山岸さんに依頼されたテーマ「国際教養大学での英語教育改革」を講演した。その過程で会員になることを強く求められ、了承した途端に理事に選ばれ、さらに副所長兼副理事長にまで一気に“昇格”させられてしまった。

この前のパラグラフの末尾のセンテンスを受身形で書いたのは、それが実感だからであり、「なぜ私が？」と問う間もなく、山岸さんの巧みな説得術で（それもかなり強引に）、すべて「させられた」からに他ならない。しかも話せば話すほど、その誠実な人柄が十分

わかるだけに、この人に頼まれたら断りにくいな、と戸惑いながらも「まあ、いいか」と引き受けた次第だった。

そういう「要職」に就いて理事会に臨み、初めて研究所の規約をはじめ過去の資料なりを概観したところで、最も率直に驚いたのが会員リストだ。すでに 4 半世紀を超す伝統のある組織なので、会員数も 200~300 人くらいに上るのだらうと思いついていたのだが、現在はわずか 40 数人しかいない。最初、思わず目を疑ってしまった。これでは昔の中学高校の 40 人学級程度のサイズではないか。だからこそ、山岸さんが関連する学会や団体の会合に熱心に顔を出し、めぼしい人たちに声をかけ、会員の勧誘に走り回っているのがよくわかった。

それと同時に、山岸所長を支えるべき副所長役を頼まれて、さて、この研究所をこれからどういう形に持って行ったらいいのか、今春以来、はたと考え込んでいる。

山岸新所長が張り切って、新しい組織図をつくり、研究部の中を 10 領域に分けて理事・会員のほとんどをそこに割り振る、という案を今春の第 1 回理事会に提案してきたときには、少し驚き、半ばあきれた。本人たちの了承もあらばこそ、「これをお願いします。ご希望によりいくらかでも変更できます」と笑みを浮かべて言われると、理事会の出席者もなかなか表立って反論しづらい。それで書面だけで見ると、素晴らしく立派な組織体制になっているのだが、実態を見れば、皆、それぞれ、では自分は一体、その領域で何をどこまですべきなのかが少しもわからない。各領域のメンバー同士、お互いに連絡を取り合って何をすべきかを話し合い、出来れば共同で調査研究を進め、その成果を月例研究会なり紀要なりで報告あるいは発表してほしい、と言われても、さて、何からどう手を付けていいかわからない、というのが実情だった。

何より、先行世代の研究所メンバーたちのように長年、お互いに気心が知れていて、簡単な「声がけ」で話が進む時代とは違ってきた。特に今年度の理事・会員には新参加者が多く、理事・会員にはなつたものの、お互いにこの研究所に何をどこまで期待していいのかわからない。連絡を取り合うにしても、若い世代は自分の職場の仕事が最優先で、研究所の仕事に優先的に取り組むよう呼び掛けることなどとてもできない。結局、「今は授業、公務で忙しい」を理由に研究所の主催する月例研究会にも理事会にも出席できない、という会員が多数派を占めることになっている。

その事情はよくわかる。特に高校教員の場合、土曜授業が多くなり、課外活動（部活）の顧問や部長となって指導しなければならず、さらに学校行事などの校務で駆り出されることも多い。また大学教員も今は普通、3~4 つの学会のメンバーとなり、土日はその会合が重なる上、学生を引率しての課外授業、フィールドワークが増え、さらに校務としてオープンキャンパスや出前授業、市民公開講座などへの出演などが半強制的に多くなっている。

つまり、会員である教師たちが皆「いつも忙しい」状況が続き、本研究所での活動にコ

ミットすることが相当困難になっているのである。昨年から今年にかけて数回、月例研究会に出席したが、参加者は会員がせいぜい10人前後、あと講師の勤務先の学生を動員するなど20人も集まればいい、という状態が続いている。それは正直なところ、じり貧状態ではないかと強く感じられる。

「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ (To be, or not to be; that is the question)」

では、どうするか――。私は何よりも、会員が「自分のキャリア・アップに有益で、参加して良かった」と実感できる活動をしなければならないと考えている。

そのキャリア・アップとはまず、教師としての技量を高める上で有益な研修・勉強の機会になることだが、それだけでは十分ではない。多くの教員が学会活動に期待しているのは、自分の職場では会えない優れた先輩、素晴らしい人たちと自由に交流でき、新しい人脈ネットワークをつくることのできることであり、職場を離れたところで仕事上、人生上のメンター（精神的指導者）を見つけることだ。さらに欲を言えば、学界内のさまざまな転職、再就職先に関する情報も得られ、推薦者を見つけることができる、ということだ。それは他のたくさんある学会で、熱心に活動している教員たちがほぼ一様に期待し、実感していることだ。

そうした会員にとっての「有益さ」を現在の研究所がどこまで提供できているだろうか。そこが一番の課題だと私は考えている。研究所が「学会」であることを看板に掲げ、会員がそれを期待する以上、会員のキャリア・アップのための活動を積極的に促すべきだろう。

具体的にはまず、会員がそれぞれ自分が主導権を握ってプロジェクトを進める醍醐味を味わう機会をつくることだ。教員の多くは所属する学校組織の中では案外、自分の名前ですべて具体的な成果を生み出すことができない。授業の改善、新規プロジェクトなどへの取り組みにしても、校務（公務）として行うものは組織最優先で、その成果も学校の名前で外部に伝えられるのがほとんどであり、担当した教師の功績は背後に隠れてしまうのが普通だ。

だが、教師ならだれでも熟知しているように、どんな共同（協働）プロジェクトでも、一人の教師の個人的な創意工夫と努力がなければ決して何も達成できないものだ。そういう現場の生々しい実情を的確に反映させて、各教員の個人的努力の成果をその人の名前で世に問い、同業他者からの率直な批判を受けながら、さらに改善・工夫を重ねる機会を求めていく。そうした自由な研究・研修の場をセミナー、フォーラムの形で提供できるのが本来の学会だろう。この研究所もその原点を確認しながら、会員各自に自分たちが個人的に面白いと思い、意欲的に取り組みたいと思う課題を出してもらいやすいように組織的に配慮することが重要なのだと私は考えている。

今、大学も高校も教育現場では「グローバル人材」（＝真の国際人）の育成が大きな目標課題になり、そのための英語教育のあり方が問われている。その場合、授業の実践報告にしても、ただ「こうやっています」という報告だけではあまり意味がない。その実践から

何に気づいたか、何が新しい問題として浮かび上がってきたかを率直に示すこと、それに対する助言、示唆を研究所の仲間から得て、さらに一緒に共通の課題を抱えている仲間を誘って、さらに1段階上の領域に向けて挑戦していくことが最も望ましいのではないか。

山岸所長を中心にする新執行部は、そうした個人の挑戦する意欲・努力を最大限に引き出し、その成果を報告発表の形で残し、それがその会員のキャリア・アップにつながっていく、という構図をこれからしっかりと描いていきたいと考えている。

会員皆さんの自主的な参加を切に願います。

## 国際教育研究所第3回理事会議事録

日 時：平成29年7月22日（土） 13：00～14：30

場 所：公益財団法人 日本英語検定協会B館1階A会議室

司会者：勝又美智雄

書 記： 小原弥生

出席者： 小田めぐみ、勝又美智雄、小原弥生、鈴木政浩、田中ケアリー、明神千代、  
山岸信義、平見勇雄、若林陽子（9名）

欠席者：赤塚祐哉、笹島 茂、山野有紀、橘 広司、斎藤裕紀、白石よしえ、山本恭子、  
林 正人、井上 裕子、山崎 勝、片山七三雄（11名）

### A. 報 告

#### 1. 第2回理事会報告

##### （1）共催セミナー関連

① 「10月29日（日）開催の日本リメディアル学会英語部会と当研究所との共催セミナー」開催の概要確認と今後の進め方の共通理解の確認」

② 「やる気を引き出す英語教育改善共催セミナー」の概要

（1）共催セミナー案内チラシ内容確認（2）共催セミナー実施関係者確認  
総合司会者（斎藤裕紀恵先生）第一部での講演者（鈴木政浩先生）  
授業実践発表者（中西千春先生、安藤香織先生）

第二部での「達成感を身に付けさせる英語授業の提言者」（猪狩保昌先生）

シンポジウム総合司会者（白石よしえ先生）

シンポジウム登壇者（鈴木政浩先生、中西千春先生、安藤香織先生、  
猪狩保昌先生、勝又美智雄先生、若林陽子先生）

③ 共催セミナー関連の今後の課題

(1) 当日配布するアンケート作成の件

過去の共催セミナーでのアンケートを参考にして原案を作る

(2) 当日の当研究所関係者の役割分担の件

理事長・副理事長サイドで、原案を作成して、協議する

(2) ニュースレター第73号の発行の件

① 広報企画・運営委員会の平見勇雄主任担当理事のご尽力と会員の皆様方のご協力で、PDF版のニュースレター第73号が予定通り発行できた。

② PDF版の紀要発行に加えて、紙媒体の紀要第22号・第23号合併号の印刷を、北山印刷株式会社に依頼して、20部の紀要が発行された。

(3) 来年度に予定されている、英検上位合格者による合格体験発表とその発表内容に対する4技能領域の各専門指導教員からのコメントを内容とする「教育問題を語る座談会」の企画に対して、英検協会から、英検成績優秀者からの人選関連でご協力が得られることになった。

B. 議案

(1) 月例研究会報告の執筆者変更の件

ニュースレターに掲載される月例研究会報告は、今までは、月例会の司会者に執筆依頼をしていたが、7月例会からは、月例会の講師に、講演の概要の執筆を依頼する。字数制限は、特に指定しない。

(2) 2017年度国際教育研究所組織図を一部変更し、理事会を各運営委員会の実質的な企画運営委員会として位置づけ、運営に当たって行く件

現在の国際教育研究所の組織図には、5つの運営委員会があるが、各委員会のメンバーが集まって、任務を果たす体制作りが困難な状況にある。

そこで、5つの運営委員会の中で、現在活動している、広報企画・運営委員会と今後の活動が期待される、紀要編集・査読運営委員会の二つの運営委員会のみを組織に残す。

残りの「月例研究会企画・運営委員会、座談会企画・運営委員会、共催セミナー企画・運営委員会」は、理事会主導で運営する。

これら三つの運営委員会の企画・運営の原案は、理事長と二人の副理事で構成される「理事幹部会」で原案を作成し、理事会を企画運営委員会と考えて、実質的な運営母体として機能をさせて行く。

## 2017年度国際教育研究所役員・理事の役割分担（確認事項）

名誉所長：羽鳥 博愛 顧問：伊藤卓治 徳矢 進

所 長（理事長）：山岸信義 副 所長（副理事長）：鈴木政浩（研究部長） 勝又 美智雄（研究副部長） 事務局長：毛利千里

理 事：① 英語教育関連の専門領域をお持ちの先生方に理事をお願いする関係で専門分野に応じた人選になるので、理事の人数制限 は決めない。

② 理事は、当研究所の幅広い研究活動の推進役となり、月例研究会の運営に当たり、月例研究会では、各専門の立場から指導・助言を行う。理事は全員研究部所属となる。希望する会 員は、誰でも研究部員となれる。

③ 今後の課題としては、各理事のご専門領域での研究希望者を 当研究所の研究部員から募り、研究活動を活発化させる。

④ 理事を中心に、そこでの研究成果を月例研究会や座談会での 発表や紀要などに反映させる。

備考：(1) 理事は、広報・企画運営委員会、紀要編集・査読運営委員会の担当理事に任命される場合がある。

(2) 理事は、各ご専門分野の領域で、会員からその分野でのグループで、指導・助言の依頼を受ける場合は、その部門の担当知事として、ご指導を頂きたい。また、各グループでの研究が深まり、それなりの研究成果が出た時には、紀要原稿執筆、月例会での講演、座談会でのワークショップなどに発展させて頂きたい。

(3) 理事は、可能な範囲で月例会にご出席頂き、ご自分のご専門の分野で 質疑・  
応答の時などで、指導・助言をお願いしたい。

(4) 毎年理事会は、11月に開催するが、必要に応じて、月例研究会の前の時間帯  
(13:00~14:30)に開催する。

### 理事の共通する専門分野の分類に関する再編成案（検討資料）

提案者：林 正人・山岸信義

1. 英語授業学研究・英語教授法研究（やる気を生み出す英語学習法・理系英語の指導法）  
鈴木政浩、山岸信義、井上裕子、白石よしえ、片山七三雄
2. CLIL(内容言語統合型学習)、世界標準の英語力養成研究  
笹島 茂、山野有紀、山崎 勝、山本恭子、斎藤裕紀恵
3. 第二言語習得・言語文化学・英文読解指導法・英語聴解力指導  
林 正人、山野有紀、山本恭子、片山七三雄、明神千代
4. 英語学（認知言語学・理論言語学）・諸英語論  
平見勇雄、橘 広司
5. 探求型英語教育研究（国際バカロレア教育手法）・批判的思考力養成  
赤塚祐哉、小田めぐみ
6. 英語発音指導・英語音読指導  
田中ケアリー、小原弥生
7. グローバル人材育成教育・異文化理解教育・実用英語養成実践論  
斎藤裕紀恵、小田めぐみ、若林陽子、勝又美智雄
8. 国際関係論・国際社会学・国際比較教育学研究  
勝又美智雄、斎藤裕紀恵、若林陽子

9. リメディアル教育・パフォーマンス学・観光英語・ストーリーテリング

鈴木政浩、山岸信義、井上裕子

10. 教育社会学・言語人類学・感情心理学

橘 広司、白石よしえ

英語教育関係者各位

## 「やる気を引き出す英語教育改善共催セミナー」のご案内（修正版）

国際教育研究所 所 長 山岸信義 (Ph. D. 言語学 元大学英語教育学会理事)

共催：日本リメディアル教育学会英語部会/ 国際教育研究所

後援：公益財団法人 日本英語検定協会

参加費：2,000 円（会員・学生は1,000 円）＊参加費は当日支払い

定 員：50名 備考：事前申込み（定員になり次第締め切ります）

◎お問い合わせ先：e-mail: [yyama300@mbd.ocn.ne.jp](mailto:yyama300@mbd.ocn.ne.jp) 携帯電話：090-1454-7901

山岸信義（国際教育研究所理事長）

総合司会：斎藤裕紀恵（早稲田大学・明治大学兼任講師）

テーマ： 「やる気を引き出す工夫と英語の授業改善」 —自律学習につながるアクティブラーニング—
--

日 時：2017年10月29日(日) 10:00(受付9:30)～17:00

場 所：財団法人 日本英語検定協会 B館 1階会議室(新宿区横寺町55)

メトロ東西線神楽坂駅矢来方面2番出口徒歩約7分、

都営地下鉄大江戸線牛込神楽坂駅A1出口徒歩約5分

**第1部 講演会・授業実践発表(10:10～12:20) ランチタイム 12:20～13:30**

**講演** 西武文理大学准教授 鈴木政浩(10:10～11:10)

「意欲を引き出す英語表現活動と学習者主体の指導の工夫」

—4技能の連動性を活かした英語を使う授業実践例—

授業実践発表 11:20～12:10) 国立音楽大学教授 中西 千春

中央大学 特任助教 安藤 香織

「英語基礎レベル学生を自律した学生に育てる授業改善の実践」

## 第2部 英語が苦手な学習者への対応の提言とシンポジウム (13:30~17:00)

司会：白石よしえ (近畿大学准教授)

1. 『英語学習の苦手な生徒に必要な3つの力 (集中力、理解力、記憶力) と達成感を身に付けさせる英語授業』 (13:30~14:30) \*休憩: 14:30~14:45

猪狩保昌 (東京都立羽村高等学校教諭)

2. シンポジウム (14:45~17:00) \*15:45~16:00 休憩 16:45~17:00 Q&A

「全体テーマ」「自律学習につながるやる気を引き出す工夫と英語の授業改善」

登壇者：勝又美智雄 (国際教養大学名誉教授) 鈴木政浩 (西武文理大学准教授)

中西千春 (国立音楽大学教授) 安藤 香織 (中央大学 特任助教)

猪狩保昌 (東京都立羽村高等学校教諭)

若林陽子 (千葉県立佐倉高等学校英語科教員)

## 第172回月例研究会報告

2017年7月22日の月例研究会では、「グローバルコミュニケーションに必要な音声指導一音楽で学ぶ英語の発音とリズム」と題して、アメリカ英語 (GA) の発話に必要な様々なルールを理論的に説明し、音楽要素を駆使して、そのルールを99枚のスライドで可視化しながらご理解を頂き、更に出席者参加型で、実際に皆で発音しアメリカ英語の発話方法を体得して頂けるように努めた。発表は三部構成をとり、第一部は英語と日本語の違いについて、第二部は英語の発話方法の詳細なルールについて、そして第三部は、英語の歌の楽譜から読み取れる、様々な英語の発話のルールを確認する事と、ジャズチャンツを歌う事で、ネイティブの英語発話方法を体験していただく事であった。以下で、これらをもう少し説明する。

第一部は、まず日本語と英語の発音の違いについて説明した。一般的に英語と日本語の発音の違いといえば、子音の違いを話題にされるが、実は母音の違いも大きく、例として、日本人英語学習者には「ア」と聞こえるアメリカ英語の7種類の音と、「オ」と聞こえる3種類の音を挙げ解説した。また、日本人が陥りやすい、2重母音の間違った発音方法についても解説し、その後、皆でこれらの正しい発音方法を練習し、その違いを体得して頂いた。また、これらの母音の発音の違いや作り方を知らないと、通じない英語になるどころか、聞き取りにも支障が出て、ミスコミュニケーションに繋がる恐れがある事も伝えた。

次に、両語の音節やリズムの違いを述べた。日本語のリズムはモーラが基本で、1モーラが全て同じ長さの一拍になる上、音節構造に関しては、子音は母音の前に来るのが基本で、それも子音1つだけで子音の連続はない。しかし、英語の場合は子音の連続があり、子音は母音の前に3つ、母音の後に4つまで置ける。それで、日本語ネイティブ話者は気

をつけないと、英語を発音する時に、無意識に音節の数を増やして発音をしてしまい、英語のリズムを壊してしまう傾向がある。更に、英語のリズムは強勢の等時性と言われ、リズム強勢を持つ強い音節が等間隔に現れるため、強弱のある長い音と短い音が混じるリズムミカルな発話になるのに対し、日本語のリズムはモーラが等間隔に現れるので、日本語の発話音は機関銃のように聞こえると良く言われる。それで、これらの違い、つまりどのように発話すると日本語のリズムになり、どのように発話すると英語のリズムになるのかという違いを、英語学習者は明確に知っている必要があると述べた。その際、これらの違いをより分かり易く理解して頂くために、発話方法の違いを音楽表記化し、視覚的にもご理解頂けるようにした。更に、その違いを体得して頂くために、同じ英文を両語の異なるリズムで音読して頂き、英語らしい音節とリズムを持つ発話がどのような物かを感じ取って頂いた。

第二部の英語の詳細な発話方法では、リズムの作り方として内容語や機能語の知識を持つ事、そして発話には音調群を作るが、その際、音調群の核となる語のピッチの卓立を、日本人が思う以上に大きくつけて作る事が必要であると述べた。また、イントネーションの付け方の違いで、同じ言葉を言っても意味が異なって聞こえるため、イントネーションの持つ意味や役割についても解説した。

それから、日本国内でしか英会話をした事のない日本人英語学習者の中には、時として、英語の文章さえ正しければ、よほどひどい発音でそれを言わない限り、大概のネイティブは理解してくれると思っている方がいらっしゃるようだが、現実はそのでもないのだと言う事も述べた。日本国内にいる外国人英語話者は、日本人英語の発話方法に馴染みがあるので、上述したように、よほどひどい発音で言わない限り、理解してくれるようなのだが、実は、一歩日本を出ると、「日本人英語」をわかってくれる英語話者は、少ないのが現実だと感じている。

それで、このような現実をご理解頂くために、私がアメリカで教える、在米日本人（日本からの留学生や商社マンも含む）のための英語発音講座でよく質問される、「通じなくて困った」と言う、彼らのお悩み英語の例を幾つか紹介し、それらの原因についても解説した。例えば、“May I speak to Beth?” という文章だ。Bethのth/θ/の発音を正しく発音しているはずなのに、全く通じず、どうしてこんな簡単な英語が通じないのか全く分からない。どうしてなのか教えて欲しいという質問だ。通じなかった理由は/θ/の発音ではなく、実は、疑問形に用いるリズムやイントネーション、つまりそれに伴うピッチの付け方や、母音の長さの問題があったのだ。つまり、th/θ/の発音は完璧だったが、リズム強勢がうまく付いていなかった事や、イントネーションに伴うピッチの幅に関係する、核となるBethの母音の長さが不十分だったのが原因だった。このような英語を話す日本人ネイティブは日本国内でもとても多く、私が英語の発話方法を教える時に、扱わなければならない重要な分野なのである。

英語はスピーチメロディーと言われ、これはピッチの変化や、強勢の等時性のリズムに深く関係している。つまり、“May I speak to Beth?” が通じなかった原因が、主にスピーチメロディーにあったと言えるのである。皮肉にも、彼らの場合アメリカ在住という事もあり、日本に来れば「英語を流暢に話せる人」と呼ばれる、いわゆる英会話に慣れた方達なのだが、何らかの理由で、無意識に日本語的な英語の話し方をしてしまう時があるのだ。彼らは通じない原因を一生懸命考えるが、一般に良く知られている/s/と/θ/や/b/と/v/のような、子音の作り方に関する問題点しか考えられず、残念ながら、他の解決策が思い浮かばないのだ。前述したように、日英の発話方法の違いを学ぶ事はとても重要である。なぜなら、両語の発話方法の様々な違いを学ぶ事で、より通じる英語が話せるようになる上、もし、英語が通じない場合があっても、何故、自分の英語が通じなかったのか、その理由を考え自分で発話方法を矯正するための糸口を見いだす事も可能になると考えるからだ。

私が英語の発話方法を教えながら常に思う事は、日本語英語に馴染みのない英語話者は、会話中の相手の英語が、自分たちのスピーチメロディーに似ていれば、少々発音に問題があっても文脈から何とか理解してくれるようなのだが、スピーチメロディーも異なり、更に発音にまで問題があると、彼ら、聞き手にとっては、大変理解し難い英語になるようなのだ。

ところで、犬は人間の言葉を理解するが、「アメリカの猫は日本語英語が通じなかった」という私に起こった猫の話も紹介した。その話とは、アメリカ在住の私の息子夫婦の猫、Shibu についてである。Shibu は、“Sit down!” という「おすわり」ができる猫にしつけられていて、いつも、息子夫婦は餌をあげる時に、“Shibu, sit down!” と言う。ある日、私も“Shibu, sit down!” と言って”みたのではあるが、一向にお座りをしない。息子の Nathan が仕事から帰り、私は息子に “Nathan, Shibu didn’ t sit down for me!” と言ったその時、Shibu が私たちのそばに現れたので、私は再度 Shibu に、“Shibu, sit down!” と言ってみた。すると驚いた事に、今回は Shibu が「おすわり」をしたのである。私が初めに、“Shibu, sit down!” と言った時は、私は日本人の友達と日本語で会話している最中であり、私の英語が気がつかない内に、単語の発音やリズムは正しかったのにも関わらず、英語特有のピッチの付け方が、音調群の核となる”Shibu”と “down” に反映されず、日本語特有の狭いピッチの幅しかない、下降調のイントネーションになっていたのが原因だった。Shibu はアメリカ生まれのアメリカ育ちで、息子夫婦もアメリカ人のため、家では英語しか使わず、Shibu はアメリカ英語しか聞いた事がなかったのである。つまり、私の1回目に言った発話のメロディーが、Shibu の知っているネイティブのスピーチメロディーではなかったのである。

Beth や Shibu の例からもわかるように、正しいリズムやピッチの付け方を知らなければ、英語の文章や発音ができて、英会話術習得には手落ちなのである。参加者の皆様には、

このような例を挙げる事で、万人が理解できる英語発話力を身につける事が、グローバルに活躍するためには、重要である事を改めて理解して頂き、更に、これらが上達するとリスニング力も、当然向上するのは言うまでもないと申し上げた。

第三部では、これらの発話のルールが、歌の楽譜ではどのように書かれているかを、ナーサリーライムの歌を用いて楽譜で確認した。また英語の詩をどのように英語の発話のルールを用いて朗読するかも、音楽表記化により可視化して理解して頂き、皆で正しいルールに基づいて朗読した。そして最後に、私の本日の講演のまとめとして、英会話を基にして作られているジャズチャンツ1曲を紹介し、それに含まれるリズムやピッチの付け方及び、音声変化等の解説をした後、皆で練習し、ネイティブのスピードを維持しながら生きた英会話として、ジャズチャンツを歌って頂き、アメリカ英語のスピーキングの醍醐味を体験して頂いた。

終わりに、月例会の私の話が2時間近くにまで及んでしまったにも関わらず、最後まで皆様が私の拙い話に耳を傾けて頂いた事に深く感謝し、また多くのご質問も頂戴できた事をありがたく思っている。最後に、多くの日本人英語学習者が、文法や発音だけではなく、英会話に必要なリズムやピッチの付け方にも関心を持って頂き、世界に通じる英語力を身に付け、グローバルに活躍してくれることを期待している。

文責：田中ケアリー（東京外国語大学非常勤講師）

<会員からの寄稿>

## 『大規模災害と教育現場』

教育図書出版 第一学習社  
福岡営業所所長 海江田淳

### 1：大規模災害の現場 ～東日本大震災 熊本大分大地震 九州北部豪雨～

学校という施設は子どもたちが成長する場ですが、大きな災害に見舞われた場合、否応なく災害の最前線となります。私は2011年東日本大震災と2016年熊本大分大地震、先日の九州北部豪雨という大災害を出版社の立場から経験しました。これらの経験から教育現場と災害について考察してみたいと思います。

当社を含む教科書出版社は過去大規模災害にあった生徒に対して教科書教材の無償提供を行ってきました（災害基本法の「応急の教育に関する活動」によって定められています）。その中で、私は日本の教育現場の強靭さとともに矛盾点を見ることとなりました。

まず、日本の教育現場の強靭さはそのMoraleの高さです。Moralもちろん高いですが、やはりMoraleの方が合っていると思います。家が壊滅的な被害を受け、車中泊や避難所生

活を強いられているにもかかわらず、子どもを学校に通わせようという保護者や自治体の意欲には本当に驚かされます。また、学校側も一日でも早く授業を再開させようと必死に設備を整え、混乱したシラバスやカリキュラムを編成しなおします。教科書教材が災害で滅失した生徒には教育委員会を通じて出版社に要請が入り、私たちは迅速に現場に教材を届けます。日常生活もままならない状況でも子どもの教育をおろそかにしてはいけないという教育意識の高さは世界でも類を見ないのではないのでしょうか。

一方で教育熱の高さが裏目に出ることもあります。一部の学校では授業再開のために体育館で避難生活をしている人に立ち退きを要求し、混乱が生じることがありました。また、避難者から学校に「津波体験を生徒に作文に書かせたらどうか」といった要望が入ることもありました。津波の衝撃は想像以上で 3・11 以後の東北地方では水や海に関する記述がある教科書や教材はできるだけ採用しないようにしているという現場の声がありました。残念ながらこうした実情の多くは報道されていません。

## 2：災害現場から考察する日本社会の教育意識

このように大規模災害という極限状況においても日本人の教育への意識は高く、むしろより強化されることがわかってきました。教材の購入についても買い控えどころか、積極的に購入して授業進度を挽回しようとする傾向があります。出版社にとってはありがたい話ですが、私個人としては一抹の不安も感じています。それは「学業最優先」の意識が我々の中にこびり付いて日常を取り戻すことよりも大学への進学や学校行政が優先されるという懸念です。教育は非常に重要な社会的活動ですが、非常事態においては人命と日常生活の回復が最優先です。今後の学校教育を考えていく中で大規模災害などが起こった際には単位取得の猶予期間を設ける、大学入試を一年遅らせて受験できるなど、柔軟な対応が当たり前の社会になってくれることを願うばかりです。

### 編集後記

10月に入り、秋らしい季節となりました。私は、四国の香川県高松市に住んでいますが、9月の中旬から彼岸花が咲き始め、遅い花は10月の上旬くらいまで見頃が続きます。彼岸花は、キンモクセイの香りと共に秋を感じる一番の指標となっています。

国際教育研究所の組織体制の刷新に伴い、理事を含めた会員の世代交代で、研究活動の充実に期待が持てるようになってきているように思います。

ニュースレターは、会員相互の情報交換や良き刺激が与えられる役割も果たしますので、会員の皆様からの図書紹介や研究ノート、英語教育に関するエッセイなどの投稿をお待ちしています。これからは次世代を担う多くの若い人たちに、いかに参加して頂くかが大きな目標になります。その為にも、会員の皆様方のご協力を得ながら、会員相互の交流による自主的研究がさらに促進されることを願っています。宜しくお願い致します。

2017年10月10日 平見勇雄